令 和 8 年 度

# 一般入学試験

# 国　　語

時間： 50 分
満点：100 点

## 受験についての注意

1　試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないでください。

2　問題用紙は 2〜11 ページ、問題は一〜二まであります。

3　解答に文字数の指定がある場合には、句読点を 1 字と数えるものとします。

4　開始の合図があったら、まず解答用紙に氏名と受験番号を記入し、受験番号バーコードのシールを指定の場所に貼ってください。

5　試験中、問題用紙の印刷が見えにくい、または文章等で不明な点がある場合は、手をあげて監督者に知らせてください。ただし、問題に関する質問には、いっさいお答えできません。

6　各問題とも、解答は解答用紙（別紙）の所定欄に記入してください。

7　終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、監督者の指示にしたがってください。

8　解答用紙だけ回収します。問題用紙は持ち帰ってください。

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「世界で一番わかりにくいのは、日本語とアラビア語だ」と外国人はこんなふうに文句を言うらしい。まあ、たしかに日本語というのはかなり変わった言語体系ではあります。

じつは、日本以外の世界に住んでいるあらかたの人びとはバイリンガルだともいえます。ひとつに限らずいろんな言語を話せることが多い。たとえば①アメリカだったら、英語だけじゃなく、むしろスペイン語のほうが通用する地域というのもある。同じように、どの国でもたいてい二カ国語くらいは通用することが多い。

それに引き換え、日本人はモノリンガルだといえるでしょう。日本語以外の言語が通用する地域というのは、まずありえない。日本語というのは言葉とA=コクセキが直結した、いわば体質的な言語だということです。だから外国語を話すことが下手なんじゃないかと言われてしまう。

その考えはたしかに成り立つ。ただ私は、逆にこんなふうにも思うんです。「日本語ほどバイリンガルな言葉はないのかもしれないな」と。

日本語には「かな」と「漢字」がありますよね。この二つは、姿も体系もまったく異なっている。「かな」から「漢字」へ、「漢字」から「かな」へ、私たち日本人はそのひとつひとつの切り替えを、読むときばかりでなく話すときも瞬時にこなしているんです。パソコンだったらこの変換は機械がやってくれるわけだけど、日常的なやりとりではそうはいかない。そのB=膨大な量の変換を常に頭の中で行うことになる。そりゃあ疲れるはずですよね。

そのぶん、翻訳は非常にうまい。それから、外国から入ってきた技術を理解して覚えるのも大層うまいといえます。

明治維新のとき、西洋文明の流入と同時に、それまでの日本語の概念になかった言葉も大量に入ってきました。日本人は、それらになんとか漢字をあてて訳して使ったわけです。たとえば「認識」とか「観念」だとかが代表的な例ですね。それを明治の初めのうちに見事にやってのけた。これは、皆さんが想像している以上に②高度な作業なんですよ。

ちなみに今の中国語の中で、政治にかかわるものなど公的に使う言葉の多くは、日本が明治の頃につくった造語を適用しています。それこそ「政治」や「経済」、「民主主義」や「共産主義」といった言葉が良い例です。いうなれば、言葉の③逆輸入ですね。もともと中国で生まれた漢字が、日本で進化を遂げ、新しい姿で中国に流入している。これも大変おもしろい現象だといえるでしょう。

こんなふうに、かなと漢字という、まったく異なった姿のものを同時に使いこなしてきたのが日本人の特殊性であり特長ともいえるでしょう。これに対し、合理化が進む現代においては「こんな煩わしいことはやめろ、いっそ標準語を英語にしてしまえ」という考え方もあります。実際、すでに社員全員に英語をしゃべらせている会社もあるくらいです。たしかに、外国人との伝達の際にはメリットがあるでしょう。［X］母国語を失った国というのはじつに惨めなものです。

伝統というのは、まさしく「言葉」なんです。その言葉を奪われてしまうということは、足場がない状態とまったく同じ。立つにも歩くにも走るにも、ただ外国の模倣にたよることになる。そもそも日本がこれまでの長い歴史の中で築いてきた伝統は、西洋の伝統とはずいぶん異なっています。その基礎を捨て去って、今さらまるごと西洋から借りなければならないなんて、人間の文化にとってこれほど悲惨(C)なことはない。

加えて、西洋の伝統からきた文明や技術の発展は、今や行き詰まりを迎えつつあるんです。年金問題も、核の問題も、すべて西洋で生まれた考え方に由来しています。日本は現代社会を形作るうえで、その文明を借りてきたはいいけれど、今になって行き詰まってしまった。そして残念なことに、西洋の文明の力では、この行き詰まりの是正(ぜせい)がなかなかできない。でも、東洋の文明――さらにいえば日本独自の伝統なら、その行き詰まりをやわらげるか、是正する力になるかもしれない。そう考えると、伝統というのはそう簡単には手放してはいけないものだということがわかるでしょう。

ところが、日本語はどうもはっきりしない、意味をしっかり限定していないと批判される。これは外国人の多くが感じていることであると同時に、外国語のできる日本人も同様に思っていることのようです。

たしかに④日本語という言語は、いくつかの難点も持っています。いうなれば、非常に悠長な言語です。表現したい内容を強く限定して投げつけることが上手でない。それに、何か危機が起こったときに発するケイコク(D)の言葉の力が弱い。他の国の言語に比べて命令形がそれほど発達していない。その命令形が動かす心情自体も強くない。そういう意味では、大変やわらかな言語ともいえます。

それから先にいったように、漢字をかなに、かなを漢字に、頭の中で変換しながら話したり聞いたりしていることの弊害も挙げられるでしょう。もちろん咄嗟(とっさ)のことだから、僕らは意識していない。だけど大変な危機に瀕(ひん)したとき、ひと呼吸、ふた呼吸遅れる恐れはある。

その一方で、限定ばかりしていくと、こぼれ落ちてしまう事柄もたくさんある。日本語というのは限定しない代わりに、ふわふわと漂うあいまいな事柄も上手にすくいとることができる。ある程度の広がりをもっている言葉を、その広がりのまま捉(とら)えることが可能な言語なんです。

一般的に外国の言葉を使うのが下手なのは、日本人と韓国人だと言われています。でも日本人と比べれば、韓国人の方がよほど上手でしょう。そう言われる理由の一つに、日本語には「子音の種類が少ない」という特徴が挙げられるそうです。［Y］、子音に対する聴覚が発達していない。だからその土地に送られて二カ月～三カ月、あるいは半年くらい経(へ)ないと、そこで使われている言葉を聞き取るだけの聴覚が身に付かないんだそうです。まあ、たしかにそういう面はあるでしょう。でも、問題はもっと根本的な部分に存在しているような気がします。

私たちの使う漢字というのは表意文字です。昔々にさかのぼれば、元は⑤象形文字なんですよ。漢字の持つ意味はたいそう広い。私たち日本人は、その意味の深さをたった一文字の中に含んで使っているわけです。つまり、ある意味の広がりを、そっくりそのまま捉えて言葉の中に組み込む能力が日本人にはある。無論、漢字というのは中国からのものですよね。しかし、現在の中国語は、近代日本語のコウゾウ(E)をだいぶ受けて、かなり表音化しているそうです。むしろ日本語のほうがまだ表意にこだわっている。

問一　二重傍線部Ａ～Ｅのカタカナは漢字に直し、漢字には読みを「ひらがな」で書きなさい。

問二　［Ｘ］・［Ｙ］に入る語の組み合わせとして正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　Ｘ　そして　　Ｙ　そのうえ
イ　Ｘ　しかし　　Ｙ　つまり
ウ　Ｘ　だから　　Ｙ　とはいえ
エ　Ｘ　ところが　　Ｙ　なぜなら

問三　傍線部①「アメリカだったら、英語だけじゃなく、むしろスペイン語のほうが通用する地域というのもある」とあるが、それは主にアメリカのどの地域と考えられるか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　東部　　イ　西部　　ウ　南部　　エ　北部

問四　傍線部②「高度な作業」とあるが、どのようなところが「高度な作業」だったのか。本文中の語句を用いて六十字以内で説明しなさい。

問五　傍線部③「逆輸入」とあるが、その例として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　日本で生み出された巻き寿司がアメリカでアレンジされて、それが日本においても人気になった。
イ　韓国で生まれた音楽が海外に渡って更に進化を遂げ、今では世界中の人々に聞かれるようになった。
ウ　イギリス人が書いた本が多くの国に渡り現地で翻訳され、内容が少しずつ変わっていってしまった。
エ　タイで作られた食器を日本に持ち込んで装飾をほどこし、完成したものを欧米の国々が輸入する。

問六　傍線部④「日本語という言語は、いくつかの難点も持っています」とあるが、どのような難点を持っているか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　これまでの長い歴史の中で築いてきた日本語独自の伝統が失われ行き詰まりを迎えつつあり、改善することが困難だと思われる点。

イ　日本人の特長でもある物事を遠回しに言う表現が、多くの外国人から意味を限定していないと思われ結果的に批判されてしまう点。

ウ　相手のことを考えて断定的に話すのを避けることにより、言葉に広がりが生まれあいまいな内容の事柄まですくいとってしまう点。

エ　制限したり指図したりする内容にはふさわしくなく、かなや漢字の切り替えを瞬時に行うためうまく言葉が出てこない時がある点。

問七　傍線部⑤「象形文字」とあるが、象形文字の漢字を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　鳴　　イ　飛　　ウ　本　　エ　晴

問八　筆者は「伝統」についてどのように考えているか。それが端的に分かる一文を本文中から抜き出し、始めと終わりの五字を書きなさい。

問九　本文の内容と一致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　日本人はバイリンガルの人が少なかったが、英語を話せる人や翻訳の技術の向上により、現在ではバイリンガルだと世界中から見られている。

イ　漢字は明治時代に中国から日本に伝わったが、当時の日本語の意味に相当する漢字にあてはめて対応し、現在の中国語にも影響を与えている。

ウ　日本語は海外から批判の対象となることもあるが、長所も持っているため、標準語を英語にすべきだなどという考え方は正しいものではない。

エ　日本人と韓国人は世界的に見て外国語の扱いが下手だとされているが、それは聴覚が他の国々に比べて未発達であることが一番の原因である。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、一部を省略しています。

若草色の風が吹きぬける四月、それまでふたつに結(ゆ)っていた髪をポニーテールにまとめて、千鶴(ちづる)は中学生になった。

中学生なんて、なるときは、だれでもなる。地元の公立中学校だから、新入生の半数は知った顔。そう考えると気もらくで、入学の日もとくに緊張しなかったけれど、唯一、クラス発表のときだけは胸がどきどきした。

千鶴が通う北見第二中学校は、一年生がA組とB組の二クラスだけ。このところ学区内の子どもがどんどんへっていて、二年生と三年生も三クラスずつしかなく、このままでは北見第一中学校と合併されてしまうとも言われている。

一年A組か、B組か。確率は五十パーセント。

なのに、千鶴は小五のときからの親友、彩菜(あやな)とはなればなれになってしまった。

二週間もたったころには、千鶴と※1しほりんはすっかり打ちとけ、そこにレイミーも加わっていた。

レイミーは天然のふしぎちゃん。※2北小でも変わり者としてとおっていた彼女は、マイペースなぶんだけ、いっしょにいて気楽な相手でもある。

最初のころ、しほりんは「レイミー」と呼ぶのがはずかしかったのか、「レイ……」「レイ……」と語尾をにごしていたけれど、じょじょに慣れて「ミー」まで言えるようになった。ほかの女子たちにもそれは広まり、仲間うちだけのものだったあだ名が、みんなのものになっていく。

千鶴はしほりんとレイミー以外のクラスメイトとも、できるだけ触れあうように心がけていた。クラス副委員長の真琴(まこと)は北小時代からのともだちだし、その真琴と仲よくなったこのちゃんと話をするのも楽しい。ひとりでぽつんとしている女子を見ると、さりげなく声をかけてあげたりもする。

座席順の試練さえうまく乗りこえれば、千鶴はそこそこ平和な中学生活を送る自信があったのだ。いじめとか、ケンカとか、そういう物騒なものとは無縁の日々。それは自分がごくふつうの［　X　］生徒だからだと千鶴は思っている。

その他大勢。それが千鶴の定位置なのだ。その平坦(へいたん)な場所では、いいことも、悪いことも、そんなに劇的には起こらない。

勉強もふつう。運動神経もふつう。顔もふつう。性格もいたってふつう。

「あんたって、ほんっとに、A鈍行タイプだよね」

四つ年上の姉は、千鶴にそんなことを言う。

「絶対、脱線しない鈍行列車。特急みたいなスピードもスリルもなくて、いつも安全運転で、無難にレールの上を走ってるだけ」

特急タイプの姉の目に、千鶴はひどくつまらない子供に映るのだろう。a平凡で b無害なありふれた女の子。おなじ景色のなかをいつものろのろ動

きまわっている。

つまらない、と自分でも思う。変わりたい。そう思う。中学に入って以来、その思いはますます強まった。

ポニーテールのわたしは、新しいわたし。これまでとちがう自分になるならいましかない、と。

「かっこいい先輩を見つけたから」と、B組の彩菜はバスケ部を選んだ。

「うちのママ、ママさんバレーで全国大会まで行ってるんだ」と、レイミーは遺伝子に賭(か)けてバレー部へ仮入部した。

千鶴は次第にあせってきた。いっそ自分もバスケ部かバレー部に、とも思ったけれど、ともだちのまねではいかにも［Y］。それに、彩菜もレイミーもすでに部活のみんなとB=ケッソクをかためているようで、そこにはもう自分の入るC=ヨチなどなさそうな気がする。

陸上部は練習がきびしそう。水泳部は水着がはずかしい。考えるほどに、千鶴は自分にぴたっとくる部活なんてどこにもない気がしてきた。もともと、運動自体、あまり得意ではないのだ。

それでも千鶴が体育系の部活にこだわったのは、「変わりたい」の一心からだった。ここで文化系の部活を選んでしまったら、このさきもずっと、自分はこれまでとおなじレールの上を走りつづけることになる。

新しいわたし。いままでとはちがうわたし。部活は、①そんな自分に生まれ変われる最大のチャンスなのだ。

そう思いながらも、足をふみだす方向が定まらずにいたある日の放課後、吹奏楽部の見学につきあってほしいと、千鶴はしほりんにたのまれた。

「ひとりじゃ行きづらくて。お願い」

「もちろん」

北見二中の音楽室は、本校舎からはなれた別棟(べつむね)の北校舎にある。わたり廊下の窓ごしに中庭を見おろしながら進むと、本校舎の※3喧噪(けんそう)や床の震動が次第に遠のいて、しんとした静けさに包まれていく。

音楽室の戸を開けた瞬間、その D=静寂をゆさぶる音がした。足もとからはいあがってくる低音。それがクラリネットの音色であることに、千鶴は室内を見まわしてから気がついた。

クラリネットだけじゃない。机を前方に積みあげてスペースを空けた室内には、想像以上に多くの部員がいた。トランペット。フルート。打楽器。それぞれのパートごとに練習している。部屋のあちこちからひびく多彩な音。その音と音とがからみあい、もつれあい、不協和ながらも②重層的な音のかたまりを生んでいる。

「見学？」

教室のすみで新入部員の指導をしていた顧問の先生が、千鶴としほりんに気がついた。

ベートーヴェンみたいな髪の男の先生。でも、顔はあそこまでやばくない。

「あ、はい」

「よろしくお願いします」

あわてて頭をさげたふたりに、「入っておいで」と手まねきする。ふたりが足をふみいれるなり、先生はぱんと両手を打って部員たちに呼びかけた。

「一年生が来たから、ちょっと聴かしてやって」

たちまち、パートごとの小さなかたまりがほぐれ、教室の中心に全員が集合した。先生の指揮棒にたぐられて、その大きなかたまりから蒸気のようにメロディが立ちのぼる。最初はふんわりと。ひとつ、またひとつと音が増え、メロディがふくらむ。ふくらむ。ふくらむ。ひとりひとりのかなでる楽器が、重なることでその音色を深め、引きたて、美しいハーモニーを育てていく。

砂浜の波が引いたあとで足もとの砂がすっと動くみたいに、千鶴の心は音のほうへと引きよせられた。曲が終わったときにはすっかり感動していた。なんの曲かもわからない。上手な感想だってひとことも言えなかったけれど、ベートーヴェン先生は「またおいで」と笑ってくれた。

「決めた。あたし、吹奏楽部に入る。千鶴もやろうよ」

しほりんに誘われるまでもなく、千鶴の気持ちも吹奏楽部へかたむいていた。

放課後の音楽室にいる自分を、千鶴はたやすく想像できた。すぐに上達するほど器用じゃなくても、まじめに練習をつんで、E チャクジツに成長していく自分。仲間や先輩たちともそれなりにうまくやっていく。ありありとイメージできる。できすぎる。

「あのね、わたし……中学生になったら、変わりたいって、思ってたんだ」

千鶴は初めてしほりんに打ちあけた。

「いままでとはちがう自分になりたくて。吹奏楽部は、すごくいいと思うし、すごくやってみたい。でも、それじゃ、いままでのわたしといっしょって気もして……」

うまく言えない。じれったくだまりこむ千鶴の横顔を、③しほりんがじっと見つめている。千鶴が本気のとき、しほりんはいつもおなじくらいの本

気さで、なにかを返そうとしてくれるのだ。ちょうどいい言葉が見つからないときには、見つかるまでずっとだまっている。
けれど、この日は早かった。
「うん」
胸もとのスカーフをのぞきこむように、しほりんはこくんとうなずいて言ったのだ。
「わかるよ。千鶴の気持ち」
「え」
「あたしも、そんなふうに思うことあるし」
「しほりんも？」
「うん。でも、それでもあたし、千鶴は千鶴らしいことをしたほうがいいと思う」
「そうかな」
「わざと自分らしくないことをするより、千鶴は千鶴らしいことをして、いままでの千鶴以上にそれをがんばって、そのさきに、いままでとちがう千鶴がいるんじゃないのかな」
千鶴は千鶴らしいことをして、いままで以上にそれをがんばって、そのさきに、いままでとちがう千鶴がいる――。
千鶴はその言葉を吸いこんだ。とたん、④夕焼け空が朝焼けみたいに光りかたを変えた。
「うん。そうかも。そうならいいな」
すうっと肩から力がぬけた。
「ありがとう、しほりん。わたし、決めた。明日、仮入部届けもって、ヴェンに会いにいくよ」
「あたしもヴェンに会いにいく」
「わたしのヴェンに？」
「あたしのヴェンだよ」
顔を見合わせたふたりの笑いがはじける。いきおいあまって千鶴が駆(か)けだすと、しほりんが「待てーっ」と追ってきた。
だいぶ足になじんできた通学路にひびく、⑤スタッカートの足音。
ふたりのスカートをなびかす風は、いつしか五月の山吹(やまぶき)色に香(かお)っていた。

鈍行列車でもかまわない。わたしはわたしの速度で行こう。そのさきにはきっと新しい、見たことのない景色が広がっているはず。

森 絵都『クラスメイツ』より

※1　しほりん … 千鶴の友人。同じクラスで後ろの席の生徒。
※2　北小 … 千鶴が通っていた小学校。
※3　喧噪 … 騒々しい様子。

問一　二重傍線部A～Eのカタカナは漢字に直し、漢字には読みを「ひらがな」で書きなさい。

問二　空欄部 X ・ Y に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　X　いたいたしい　Y　いさぎよい
イ　X　あどけない　Y　ねたましい
ウ　X　うしろめたい　Y　恥ずかしい
エ　X　めだたない　Y　なさけない

問三　波線部a・bの対義語をそれぞれ漢字で書きなさい。

問四　傍線部①「そんな自分に生まれ変われる最大のチャンスなのだ」とあるが、このような千鶴の気持ちが外見に表れている部分を本文中から十字で抜き出しなさい。

問五　傍線部②「重層的な音のかたまりを生んでいる」とあるが、どのような意味か。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　多くの音が一つにまとまっていること。
イ　一つひとつの音が重くひびいていること。
ウ　いくつもの音が重なり合っていること。
エ　それぞれの音が全く調和していないこと。

問六　傍線部③「しほりんがじっと見つめている」とあるが、この表現は、しほりんのどのような様子を表しているか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分の悩みを上手に表現できずにいる千鶴に対し、言葉をかけてあげようとタイミングをうかがっている様子。
イ　自分の悩みを自分自身でも理解できずにいる千鶴に対し、一刻も早くアドバイスをしようとあせっている様子。
ウ　自分の悩みを自分自身でも理解できずにいる千鶴に対し、何と声をかけようかと言葉が見つからずにいる様子。
エ　自分の悩みを表現できずにいる千鶴に対し、どうして自分に悩みを打ち明けてくれないのか戸惑っている様子。

問七　傍線部④「夕焼け空が朝焼けみたいに光りかたを変えた」とあるが、これはどのようなことを表そうとした表現か。それを次のように説明するとき、（　Ⅰ　）・（　Ⅱ　）にあてはまる言葉をそれぞれ十五字以内で書きなさい。

吹奏楽部に入部してがんばることは、一見（　Ⅰ　）ようにみえるが、実は（　Ⅱ　）ことにつながるのだと千鶴が確信したことを表す表現。

問八　傍線部⑤「スタッカートの足音」とあるが、短く刻むような足音がひびく様子から、誰の、どのような気持ちが読み取れるか。二十字以内で説明しなさい。

問九　本文について説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　千鶴としほりんが先生を「ベートーヴェン先生」や「ヴェン」と呼ぶ姿を表現することで、二人がこの先生に対する信頼を強めていることを表している。
イ　「若草色の風邪が吹きぬける四月」や「五月の山吹色」のような、時と色の表現を効果的に用いることで、新学期のさわやかさと明るさを表している。
ウ　人を「鈍行タイプ」や「特急タイプ」などと分類している様子を描くことで、人間を大きく二つのタイプで捉えようとする姉の単純さを表している。
エ　登場人物の「しほりん」を名前ではなく、ニックネームを用いて示すことで、つねに千鶴の視点から物語が描かれている作品であることを表している。